



警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年3月発行（第47号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「悪霊に席卷される時代」 エレミヤ

◎証「聖書が語っている『金持ち』について」 E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「悪霊に席卷される時代」 by エレミヤ

本日は悪霊に席卷される時代として、このことを見ていきましょう。

< 終末の日の教会は悪霊に影響される >

聖書は終末の日の教会が悪霊に惑わされ、影響されていくことを語ります。以下の通りです。

“1テモテ4:1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。”

この箇所には後の時代、すなわち、終末の時代になると、教会に惑わす霊、悪霊が働いてくること、そして、その悪霊に惑わされるクリスチャンが出てくるということが語られているのです。

以前、終末の日に悪霊の教理が教会に入ってくることを語りました。このことは、真実ですが、しかし、問題はこのこと、教理の問題に留まらず、さらに霊においても問題があり、聖霊が働くべき教会内に悪霊の働きが起きてくる、

そのような問題が起きることを知しましょう。

< イエスを追い出し、悪霊に席卷された時代 >

一つの時代の神の民がすっぱり悪霊に惑わされてしまう、とはあってはならないことですが、しかし、かつて、主イエスの時代に現実に起きたことです。以下のことをば見てください。

“マタイ12:43 汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。

12:44 そこで、『出て来た自分の家に帰ろう。』と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。

12:45 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうすると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。”

ここで主は「邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。」として、この時代、すなわち、主がおられた時代が、7つの悪霊に席卷されるようになることを語りました。そうで

す、この時代全体が悪霊に惑わされることを語ったのです。いったいこれはどのようなことがらを語っているのでしょうか？このことの意味合いを考えてみましょう。

“汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいつつ休み場を捜しますが、見つかりません。”

ここでは、悪霊が追い出され、住む所がないことが描かれています。このことは、主イエスの時に成就しました。この時代は多くの悪霊が追い出された時代であり、以下の様に多くの悪霊が主イエスにより、追い出されたのです。

“マタイ8:16 夕方になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れて来た。そこで、イエスはみことばをもって霊どもを追い出し、また病気の人々をみなお直しになった。”

この時代、悪霊は追い出されました。しかし、それはほんのひと時であり、またこの時代に悪霊が舞い戻る日が来ます。以下の通りです。

“12:44 そこで、『出て来た自分の家に帰ろう。』と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。

12:45 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。”

また、悪霊が舞い戻ったことが記載されています。何故、せっかく出て行った悪霊がまた、この家、この時代に住み着くようになったのでしょうか？その理由は、「家はあいていて」ということばにあります。すなわち、その家には本来存在しているべき主人がいない、居るべき方が不在であるという問題なのです。主人がおらず、不在なので、これ幸いと悪霊が我が物顔で住み着くようになったと理解できるのです。

主人がいない、王がいない、このことは歴史的な事実であり、この時代の人々は王である方、多くの悪霊を追い出した主イエスをあろうことか、悪霊つき、ベルゼブルの霊の者と呼び、追い出しました。ついには、異端、カルトとして逮捕し、十字架で処刑し、彼をこの時代から取

り除いたのです。そうです、王である方、この家の主人は追い出され、不在になったのです。

結果、この邪悪な時代は、悪霊に席卷され、惑わされるようになったのです。この時代といわれた、一つの時代の全ての神の民がごぞって惑わしに入ったと主がいわれていることに心をとめてください。一つの時代の神の民がまるごと、悪霊の惑わしに入ることなどあり得るのでしょうか？このことは私たちの常識を超えていますが、しかし、福音書を読むとき、あり得ることと理解できます。

以下の福音書の記述は、悪霊に惑わされ、席卷されたこの時代の人々が、ついには、あろうことか、自分たちの王を自ら十字架につけるようになったことを記載しています。

マタイ27:22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストとされているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはいっせいに言った。「十字架につけろ。」

27:23 だが、ピラトは言った。「あの人がかような悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ。」と叫び続けた。

27:24 そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」



悪霊的な聖霊の第3の波の提唱者、ピーター・ワグナー

神を信じ、聖書を読んでいるはずのユダヤ人達が惑わされ、熱狂的に神から遣わされた方を殺すよう、願っている姿をここでみます。この惑わしは他でもない悪霊によるものなのです。

これらの悪霊に惑わされた群集にしてもまた、指導者である祭司達、律法学者たちにしても、誰一人自分たちが悪霊に惑わされているなどと思っただけの人はいなかったことを心にとめましょう。彼らは自分たちは聖書もその神も信じているし、またその教えを行っているつもりだったのです。しかし、実際は彼らは自分たちの王を追い出し7つの悪霊に惑わされていたのです。同じような惑わしが終末の日に再現するでしょう。すなわち、自分たちこそ正統派であると自負を持つクリスチャンが悪霊に惑わされる日が来るでしょう。

さて、このこと、この時代の人々が神の霊を受け入れなかったことは他の表現でも記載されています。以下の記述では、この時代が神の霊を受け入れず、結果として惑わしに入っていくことが表現されています。

“ルカ13:34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。』“

鳥は、「御霊が鳩のように下る」と書いてあるように、霊的なことのたとえです。ですので、「めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。」とは、神の霊が神の民を導こうとしてきたのに、神の民はそれに従わなかったとの意味合いです。このように、この時代は邪悪な時代であり、神の霊を受け入れず、追い出し、結果として、悪霊に導かれ、惑わされ、自滅するようになる時

代だったのです。

悪霊に導かれ、それゆえ神により遣わされ、語っていた主イエスを追い出し、十字架で殺した人々は、その後、どうなったでしょう？彼らは結局、支配者であるローマに反抗し、滅ぼされるようになりました。その反抗の結果、エルサレムは、西暦70年、ローマの軍隊に囲まれました。そして、都の民は、最後の一人まで虐殺されてしまったのです。そうです、彼らは自滅したのです。そして、これが、悪霊に惑わされた時代の結末だったのです。このことは今の時代に対する教訓です。

<終末の日にも悪霊の惑わしは再現する>

さて、主の初降臨の日に起きたことは再臨の日に起きることの預言でもあります。このことは再現する可能性があります。終末の時代に新約の神の民が邪悪になり、聖霊を追い出し、結果として、教会が悪霊に席卷されるようになることが想像できます。それを裏書きするように、以下のことばはその日、教会から聖霊が追い出され、結果反キリストの霊が、教会を席卷することを語ります。

“2テサロニケ2:6 あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがあるのです。

2:7 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。”

ここで語られている引き止めているもの、がすなわち、聖霊なのです。そして、「しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。」と書かれているように、その聖霊がいずれ取り除かれる、すなわち、教会から追い出される日が来るということが預言されています。そして、その結果、「彼」すなわち、反キリストの霊が教会を席卷するようになるのです。ですので、終末の日の教会が

ら聖霊が追い出されること、その結果、悪霊が教会を支配するようになる、ということは望ましくはないがしかし、聖書が明確に預言している未来であることを知しましょう。

他にもこのこと、聖霊が終わりの日に教会から追い出されることを暗示する箇所があります。たとえば、黙示録の7つの教会の最後の教会、ラオデキヤにおいては、もう主は家、教会の中にはいません。以下の通りです。

“黙示録3:20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。”

本来は家、教会のあるじであり、その家の中心におられるべき方、主イエスはこの7つ目の教会においては、外に追い出されているのです。これは、先ほど見た、誰も住んでいない、からっぽの家に通じます。そして、この教会、主を追い出した教会はいずれ、7つの悪霊に支配されるようになることも暗示されているように思われます。

あたかも看守が撃ち殺された後、囚人が刑務所を脱走するように、その日、聖霊が追い出され、結果、悪霊、反キリストの霊が教会を席卷するようになるのでしょうか。

教会から聖霊が追い出され、悪霊が席卷するようになる？そんなことは聞いたことがない、という人もいるかもしれませんが。しかし、私達に聞く耳があるなら、このことは実は聖書の中でたびたび語られていることなのです。

<悪霊のしるしの時代>

教会に悪霊が働くというとき、具体的にそれはどのようにして働くのでしょうか？聖書はそれは、しるしと不思議のリバイバルとして、働くことを語ります。以下の通りです。

“マタイ24:24 にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。”

“2テサ2:9 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、

2:10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。

2:11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。”

ここでは、終末の日には、サタンの働きにより、「あらゆる偽りの力、しるし、不思議」が教会で起こされることが書かれています。

さて、このような視点、「偽りの力、しるし、不思議が教会に起きる時代」という観点で今の時代を考えてみましょう。その視点で見ると、実は現代は、このようなしるしや不思議が教会内でもはやされている時代なのです。具体的には、ピーターワグナーや、ベニーヒンが主張するいわゆる聖霊の第3の波がそのしるしと不思議のリバイバルです。

ペンテコステ系の教会を始め、多くの教会がこれらのしるしや不思議を手放しで受け入れています。また、すばらしい神のわざが現れているとして、もてはやしています。しかし、それは本当に神から来たものなのでしょうか？これらの働きは、悪霊の働きである、と指摘する人々が欧米にはたくさんいるのです。

繰り返しますが、聖書は終末において、教会があらゆる面で異常になること、その結果、教理もおかしくなり、悪霊の教理へと変わること、さらに、その霊もおかしくなり、聖霊ならぬ、悪霊が席卷するようになることを語ります。このことばに耳を傾けましょう。

＜強いものをしばる＞

教会に悪霊が入ってくる、このことをもう少し考えてみましょう。いったい、どのようにして、教会に悪霊が入って来るのでしょうか？そのことに関連してかつて主はまず強いものを縛ることを語りました。以下の通りです。

“マタイ：12:28 しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。”

12:29 強い人の家には行って家財を奪い取ろうとするなら、まずその人を縛ってしまわないで、どうしてそのようなことができますでしょうか。そのようにして初めて、その家を略奪することもできるのです。”

ここで、主は、強い人に守られている家、すなわち、神の家がどのようにして、攻撃されるかを述べました。その方法はまず、その強い人を縛ることでした。これは預言的なことばであり、そして、後に成就しました。何をいつているのかというと、このことばの通り、当時の神の民を席卷しようと試みたサタンはまず強い人、キリストを縛ったのです。以下のことばの通りです。

“マタイ27:1 さて、夜が明けると、祭司長、民の長老たち全員は、イエスを死刑にするために協議した。

27:2 それから、イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。”

ここに書かれているように、惑わされた民の長老たちは、悪霊がうながすとおり、この神の家の強い人、キリストを自ら縛り、死に渡したのです。そして、その結果、この家、神の民は、サタンにより、蹂躪され、すさまじい惑わしに入ってしまったのです。家は強奪され、家財は奪われていったのです。

そして、同じことが終末の日に繰り返されるでしょう。いずれ、新約の神の民は神の家の強い人、すなわちキリストの霊である聖霊を悪霊よばわりし、追い出すようになるでしょう。そして、その結果、サタンの惑わしに渡されるの

です。このような未来を預言するように、上記マタイの箇所は以下の様に続きます。

“マタイ 12:31 だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒瀆は赦されません。”

12:32 また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。”

強い人が縛られることに関連して聖霊への冒瀆が記載されているのです。これらのことがらが関連していることが想像できます。おそらく、かつて、神の民がイエスをベルゼブル扱いして追い出したことがその日、再現するのでしょうか。終末の日に惑わされた神の民は、聖霊をベルゼブル扱いし、教会から追い出すようになるのでしょうか。

そして、このことの兆しはすでに起こりつつあります。今、ペンテコステ系の教会ではしきりに悪霊を縛る、との働きが強調されています。このことは、良い働きの様に見えますが、実は、サタンの用意周到な準備の下に始まったムーブメントなのです。この「縛ること」は、いずれ惑わしの中で、神の霊、聖霊を縛る働きに連なると思われます。そうです、神の家、教会の強い者が縛られる日が来るのです。惑わされた彼らはすでに、ベニーヒンなどの悪霊を受け入れています。聖霊を追い出す日も遠くはありません。終末における主のみこころを行いましょう。

—以上—



悪霊のリバイバルで倒される人々

以前から少し疑問に思っていたことがありました。それはイエスさまが言われたことなのですが、以下の聖書箇所です。

参照 マタイの福音書 19:23,24

19:23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。」

19:24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」

上記の下線の箇所では、「金持ちが天の御国にはいるのがむずかしい」ということを言われています。このみことばをそのまま文字通りに読むなら、この世で多くの財産やお金を所持している人が天の御国に入るのは難しいと、そのように理解できます。たしかにこの世の中、お金で動いていることが多いですし、お金によって解決するなんてこともありますので、それも案外否定はできません。そう、お金でほとんどのことを済ませられるのなら、神さまに頼る必要性をほとんど感じないのですから、天の御国どころか信仰を持つことすら難しいのかもしれない。もちろん生活にはお金が必要なので、一円も持たないということはないのですが、必要以上にお金を求めたり、神さまよりもお金を愛することには全く御心はないという風にとることができます。ただし・・・もともと大金持ちの家に生まれた人が皆、クリスチャンになれないのか？あるいは御国に入れないのか？と言うと、それは違うと思います。今しがた申し上げましたように、お金は生活していく上でどうしても必要です。そして沢山のお金を所持していることが悪いのか？と言うと、それも悪くはないと思います。お金をいくら持っているとか、ビルをいくつ所有しているかではなく、お金や財産の多い少ないに関係なく、要はお金や財産に執着することには御心がないのです。先にも言いましたように、神さまよりもお金や財産を優先することはダメだということです。なので持っていたとしても、そういうことに支配されたりせずに、あるいはそれらを捧げて主に仕えていくのなら神さまに喜ばれるのではないかと思います。

以上は「金持ち」に関しての表の意味合いなのですが、私自身は単にそれだけではないのでは？と思ひまして、この箇所を通読するたびに主に「何か他に語っていないでしょうか？」と何気なく聞いていました。そしてつい最近、礼拝のメッセージで学んだ詩篇41篇のみことばをはじめとして、いくつかのみことばを通して「金持ち」に関しての長年の疑問が氷解しました。まず、詩篇41篇のみことばを見てみたいと思います。

参照 詩篇41:1

41:1 幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。主はわざわいの日にその人を助け出される。

以下はエレミヤ牧師がメッセージしていたことですが・・・

下線の「弱っている者」はKJV訳だと「貧しい者」とあります。そして「貧しい者」とは「心の貧しい者」という意味合いです。この世でもそうですが、「貧乏」ということばで連想するのは、お金が無いので乞食のように物を欲しがっているイメージです。このことは霊の世界でも同じで、霊的において貧しくてそこにとどまらず、乞食のように一生懸命求めていく人のことです。霊的な事柄に関連して、霊的な渇きがあって積極的に乞食のように求めていくなら、それは神の前に幸いなことで、天の御国をゲットするパターンです。

以上のことが礼拝のメッセージで語られていたのですが、「なるほどー」とうなずくものがありました。それからしばらくして祈っていたら、突然ひらめくものがありました。「貧乏の反対語は、たしか金持ちではないか?!」と。さっきの話だと、霊的に貧しい人は神さまに祈り求めていくということでしたが、反対に霊的な金持ち、いわば富んでいる人は神さまに祈り求めない人、もっと言うなら神さまに頼らずに自分の力に頼る人のことを言われているのでは？と思ひました。「祈らなくたって楽勝にクリスチャン生活をやっていける！」なんていう人が、まさに聖書で言われている「金持ち」だということをその時に理解しました。

特別金銭に富んでいないとしても、靈的にこういう状態の人のことに関しても、神さまからの視点だと「富んでいる人」「金持ち」なのでは？と思います。その時に示されたみことばも見てみたいと思います。

参照 黙示録3:17

3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

「富んでいる」「乏しい」ということばは、まさに先ほどの「金持ち」「貧しい」ということばと符号するのではないのでしょうか？「自分は富んでいる…乏しいものは何もない」と言っている人に対して神さまは、「みじめで哀れで…裸の者であることを知らない」と言っています。これは私の想像なのですが、「自分は何の問題もない、しかも自分には力や能力がある。だから神さまに助けてもらわなければならない」ということを口に出さないまでも、主の助けや力を求めることを実践しない人のことを言っているのではないかと思います。でも、そんな人に対して、「みじめ…」だと、神さまは言っているのです。さらにもう1つみことばを見てみたいと思います。

参照 I テモテへの手紙5:3-6

5:3 やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。

5:4 しかし、もし、やもめに子どもか孫かがいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。

5:5 ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげていますが、

5:6 自堕落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。

上記箇所では、「やもめ」について書かれています。今回のテーマと「やもめ」とは一体何の関係があるのか？と思うかもしれません。「やもめ」とは、この世において伴侶を失った人のことを言いますが、聖書に関しても大事な意味合いがあります。それは何かと言うと、男女問わず、もしくは結婚している、結婚していないにかかわらず、真の夫であるイエス・キリストに望みを置いているクリ

スチャンのことを、「やもめ」と言います。そういう意味合いでは、聖書に出てくる「みなしご」ということばも同じ意味合いです。人間の父親がいても、しかし本当に頼るのは天におられる神さまを父としているクリスチャンのことです。そしてI テモテの手紙によると、「やもめ」と表現されているクリスチャンであっても二種類の人がいることが分かります。「ほんとうのやもめ」と呼ばれる人と、そうではなく、「自堕落な生活をしているやもめ」です。その区分は5節を読むと明らかですが、真の夫であるキリストを頼りとしているかいないかの違いです。「願いと祈りをささげている」クリスチャンは、「ほんとうのやもめ」と呼ばれ、そうでないクリスチャンは、「自堕落な生活をしているやもめ」という評価を神さまからされてしまい、挙句の果てには6節にあるように、「生きていても死んだ者」という風に見なされてしまうのです。「生きていても死んだ者」とは、肉体の命は生きていても、靈的には死んでいるということです。神さまに祈らない、頼らないというときに、私たちは靈的に枯渇すると、いわば神さまの霊が内側に宿っていないので死んだも同然になってしまうということを言われているのです。でも、「ほんとうのやもめ」の歩み、つまり神さまに望みを置いて絶えず願いと祈りを捧げていくなら、「心の貧しい者」という風に神さまから見なされ、そしてこのことは神の前に賞賛されることなのです。

今回、「心の貧しい」「乏しい」「ほんとうのやもめ」ということばを通して、「金持ち」の危険性について私なりに霊の深みにおいて多少なりとも理解したことを証させていただきました。表の意味合いだけを見るなら、この世の神さまを知らない未信者の人だけのことを言われているように思いますが、じつはこのことは私たちクリスチャンにも大いに関係があることなのです。こんな風にはっきりと示されるまでは少し難しく考えていたのですが、実際に神さまが語っていることはとても単純なことで…ひと言で言ってしまうと、クリスチャン生活を送っていく上で、神さまの力に頼っていくのか？はたまた神さまに求めずに自分の力や思いや考えを優先して行っていくのか？ということ言われているのです。もし、私たちが「金持ち」の歩みをするならイエスさまが言われたように天の御国を受け継ぐのは難しいと思います。

でも、反対に心の貧しい歩みに徹していくなら天の御国が約束されていますので、ぜひそのような歩みに徹していきたいと思えます。そのことについてはっきりと言われているみことばがありますので、また、私たちに希望を与えるものなので、その箇所を読んで証を終わりにしたいと思います。

参照 マタイの福音書 5:3

5:3「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

今回も大切なことを教えてくださった神さまに栄光と誉れがありますように。—以上—

<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の闇に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。12月1日発売。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com